

---

# 竜と自由の空

微工口

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜と自由の空

### 【Zコード】

Z5076S

### 【作者名】

微H口

### 【あらすじ】

空を駆ける少年と、彼の周りにいる変態達の物語。

原作前 HS学園編 福音のアニメ基準ストーリー  
ヒロインはセシリアル予定。

気の向くままに、あまり考えずに書くので設定矛盾の可能性は大。  
それでも読んでいただければ幸いです。

あと、カワカミン感染中

## 0・想いの始め（前書き）

- ・境木ラのPVでカワカミンが暴走した
  - ・今書いている別作品がちとスランプ気味だった
  - ・仕事が忙しくてストレス解消を：
  - ・アニメISが思いのほか良かつた
- などの理由があり、見切り発車で始めた物語。
- 更新頻度は緩やかですが、楽しんで頂ければ幸いです。

## 0・想いの始め

それに、自分は一瞬で心を奪われた。

「見る。アレックス・サンダーソン」

少しだけ型遅れの飛行機の中。

その広くないコックピッドの中での、父の友人は幼い自分を己の前に座らせて言った、見ると。

「

そう言われて閉じていた目を開けた。直後、自分の瞳に飛び込んできたのは 青だ。

薄い青が上にあり、濃い青が下にある。空と、海の青。

その青と青の狭間に、自分は父の友人と共に居た。

「これが空だ。自由の空だ」

わかる。そうだ、これが空なのだと。この何物にも束縛されないされるはずもないこの景色。

言葉も出ない。憧れ故に、感動が増幅されたなどと、そんなものでなはい。

圧倒され、想いが芽生える。何時までも、この景色をみていいと。目の前の光景をただただ見ていたいがために、視覚以外の情報が著しく低下するような気さえした。

耳に聞こえる風を切る轟音も、被りなれないフルフェイスのヘルメットも、口内に感じる渴きも、鉄臭いコックピッドの匂いも… どれもこれも気にしなくなつた。気にする余裕もなくなつた。

そして、次に芽生えたのは衝動だ。

気持ちの行くままに、自分も力を得てこの空を翔けたいという、騒動。

考えるだけで胸が高鳴った。

「どうだ？ アレックス・サンダーソン」

瞳を輝かせ、一心に前をみつめる自分に、そつと告げる。問いかけに、幼い自分は答えた。やつと巡り合えたような気がした、と。

「そうか、…………そつ思えるのか、お前は」

満足するように、父の友人であるダン・ノースウインドは頷いた。可笑しなことを言ったのだろうか、と訪ねる自分に、彼は言った。

「そうだな。可笑しいことだ…………お前は、お前の父と同じことを言つたのだからな」

そう言つて、彼は笑つた。

ヘルメット越しでも見える、柔らかな笑顔。それが、次の言葉と共にすつと引き締まる。

「だが、憶えておけアレックス・サンダーソン。空とは平等だ。平等に全てを与える。

俺の友でもあり、お前の父であるジョームズ・サンダーソンはそんな空を愛し……そして、この空に散つていった」

わかっている。頭でも、心でもわかっているつもりだ。

父からは兄と共にずっと聞かされ続けてきた。その父が死んだこと

で、どうこうものなかと思い知らされもした。

「アレックス・サンダーソン。お前は、それを知つていて尚、空に思いを寄せるか？」

本来ならば、忌避すべきものなのかもしない。

父を奪つた空を、憎むこともできたかもしない。

だが、自分には無理だ。自分と兄には無理だ。

父が、どれだけこの空を愛していたかを知つている。

随分と前に亡くなつた母が、そんな父を大好きであったことを知つてゐる。

兄と自分が、そんな父をどれだけ誇りに思つていたかを、知つてゐる。

そして自分は、どうやら父と同じらしいのだから。

「ならば、だ。アレックス・サンダーソン。成つてみろ」

答えに満足したのか、彼は二ビルに笑いながら操縦桿を引いた。同時にスロットルが引き絞られ、機体が上へ上へと向かっていく。

体に掛かる重圧は、幼い身に厳しく圧し掛かつてくる。

数秒続いたそれが唐突に止めば、先ほどよりも高い位置から空を見上げ、見下ろしていた。

「それはパイロットの間で話される、くだらない御伽噺だ」

知つてゐる。自分はそれを、兄と共に父から聞いた。

冬の暖炉の側で聞いたこともあった。三人で共に眠る時、自分が眠るまで語つてくれたこともあつた。

憶えている。父は樂しく、そして誇らしげにその存在のことを、自分達に聞かせてくれた。

「そうだ。ソレは眞の空の王者。何者にも束縛されず、この自由の空を誰よりも自由に雄々しく翔け抜く者。

空に夢を見る者達の想いが集つた結晶。誰もが耳にし、だが誰もみたことのない幻の存在」

そうだ。それは空想の產物だ。実際には存在しない、人の想像から生まれた存在だ。

だが、飛行機乗り達はその存在に夢を見た。

その存在のよに、自分達もこの自由の空を翔け抜くのだと、胸に秘めながら……

「それは

」

いつか、その存在になれたらと、そう胸に宿して、自分達

は、空を征くのだから。

## 1：空馬鹿と愉快な仲間達

青の色が、目の前に見えた。彼の視界には、それしか見えない。上も下も、右も左も、前も後ろも、全てが青一色で包まれた空間。違いがあるとすれば、それは色の濃さだろう。それも、上と下の2点だけ。上にあるのは薄い青で、下にあるのは濃い青。

それだけ。それ以外は何も無い。本当にそれだけしかない空間

大空。

アクセントとして、上に白い大きな太陽がある程度。

その青と青との境界を

「

」

誰にも咎められず、彼は自由に進んでいった。それはありえない光景だ。人は空を飛べない。そんな力を、人は単体として持つてはいない。だが、現実として彼は大空を自由に翔けている。命令されず、束縛されず、己の意思で、気の向くままに翔けている。それを可能としていたのは、彼が見に纏う『何か』だった。

そう、彼は『何か』を身に纏っている

太陽の光を反射するのは人の肌でない。陽光を反射するのは、青く磨かれ装甲だ。

空の青というよりは、海の青に近く、所々に白いラインが入っているその装甲を、彼は全身に纏っている。顔も、体も、手足の先から足先までの全てを、だ。

全身装甲。

その名の通り、全身を纏つて姿を隠すソレは、一見すれば男性か女性かの違うすらわからない。

間接部に余裕を持たせ、それ以外は鋭利な刃物のようすに磨かれた鋭いフォルム。

特に頭部のフルフェイスの頭部装甲はその傾向が強い。エメラルドグリーンを持った切れ目の瞳と口先へ向けて細く尖る形状のそれは、まるで竜の顔のようにすら見える。

それには、名がある。そういうた機械全般を指す、通称だ。IS。とある天才が生み出した、新たな可能性を秘めた機械。それを彼は身に纏い、空を翔けていた。

「ラ

フルフェイスの頭部装甲から、音が漏れた。

声変わりを終えた、青年の声

流れる音にはリズムがあり、歌詞がある。

「

S i l e n t n i g h t

それは歌だ。聖夜に流れる、誰もが知っている歌。

世界を大事に思う聖者が夜に生まれ、祝福される歌。

「h o l y n i g h t . . . . .

加速する。歌を口ずさみながら、気軽に彼は更に加速する風を切つて音を立てながら、先へ先へと進んでいく。

「……All - s asleep」

直後、まるで直角とも言える角度で彼は落ちて、否、方向を変えた。高度が見る見る下がり、はたから見れば数秒もしない内に海面へと激突するかと思われる光景。

だが、彼は海面すれすれでまたもや方向を変え、海面と平行に飛び続けた。

「one sole light……」

従来の航空機ではありえない軌道。

まるで重力からも解き放たれたかのような、束縛されない自由な動き。

フルフェイスの頭部装甲の中で、彼は「はは……」と笑う。ああ、飛ぶというのは、なんと楽しいことなのだろうか……つと。

『随分と、随分と機嫌が良いな。アレックス』

アレックスと、そう呼ばれた彼の耳に、通信機越しからの声が聞こえた。

男性の声だ。落ち着きをみせる、大人の男の声。彼にとつて、慣れ親しんだ者の声。

「ああ、リチャード兄さん。…………そつだね、今、凄く楽しいよ

『何も無いのにか?』

「何も無いからこそ、だよ

そうだ。ここには何も無い。何も無いが、ある。

亡き父が愛した空がある。

自分に空を教えてくれ、そしてその後直に父と同じように空に散つた……父の友人が愛した空がある。

兄と共に夢を見、そして求めた空がある。  
飛ぶたびに思う。この喜びを、彼は アレックスは飛ぶたびに感じていた。

「にしても、どうしたのさ。特に問題は起こってないよ?」

『なに、テスト飛行に問題は無いか聞きたかっただけだ』

「計器でこっちに問題が無いのはわかってるんでしょ?』

『それでも、それでもだ。本人から直接聞きたいと思うのだよ』

言葉に、アレックスは優しい笑みを浮かべた。

純粋に、こちらを心配してくれる兄の態度が嬉しかったのだ。

「兄さんは心配性だなあ」

『ああ、自分でもそう思つ』

静寂。そして、数秒してから互いの口から笑いが漏れた。

大声を出しての笑いでない。ふつと、息が漏れる程度の軽い笑い。  
通信機越しによる、声だけのやり取りのため、互いの顔はみえはない。

だが、兄弟は互いが笑顔であることを感じていた。

肉親による穏やかな時間。  
それが、

『リツくーーん!!』

直後、やたらハイテンションな女性の明るい声によつて、

『がつーー!?』

通信先の男性の声が痛みを感じさせぬくもぐつた声へと変わり、中断された。

ガタガタ… つといづ音を、通信機越しに聞いたアレックスは思った。

……ああ、また束さんか。

大方、兄のリチャードにダイブして抱きついたのだろう。自分達が所属する愉快な秘密結社のリーダーは、仲間内でいる時は何時も何時もハイテンションだ。そして、やたらと血の兄に懐いているのを、アレックスはよく知っている。

『なんの、なんのつもりだ束

静けさを乗せた声で、兄が女性の名を呼んでいるのを聞いた。予想通りの人物の名があがつたことに、アレックスはやれやれっと思った。

『うん！ ちょっとリツ君分を補給しに来ました！！だからハグ！ 束さんにハグプリーズ！！』

『よしわかった。ならばしてやるわ』

ミシツと、通信機越しから大層な音が聞こえたのを、アレックスは聞いた。

まるで骨が軋むような、そんな音。

そして、この二人と行動を共にする自分にとっては、何故か聞きなれた音。

『痛たたたたた！ノウ！それハグ違ひつい…』

『強く抱きしめているだろう？』

掌で』

『これ頭だけ！頭だけじゃん！そうでなくて束さん自身を包むようにな… つてあああああああここに来て握る力パワーアップとかあああああ…』

アレックスは思つ。

……ああ、声だけで場面が脳内再生されるな。

何時ものことだ。愉快な仲間達からは夫婦漫才とすら呼ばれている、何時もの光景だ。

とこうか、弟としてアレックスは思つ。兄のあの態度は無い…と。あんなわかりやすい好意を向けられていて気が付いていないのだ、あの兄は。

鈍感…、一言で言い表せばまさにそれ。

『…まつたく。何度も言つているだらうが、抱きつくなつと』

『えーー。いいじゃん別にーーー』

『私が困る』

『あれ？もしかしてもしかして、リックくん束さんに抱きつかれて恥ずかしかつた？』

『疲れるだけだ』

『そうだよねーリックくんだもんねー』

『何をいじけている？束』

……束さん！ ファイトっす！！

思わず十字を切つてアレックスは祈ってしまった。  
兄を好いてくれる女性に幸いあれ、つと。

『それで束。君は確か』

『あ、うん、白式の最終点検がもう少しで終わるそなんだよ！ だからリックくん分を補給しに来たのです！』

白式……その名をアレックスは聞いた記憶があつた。それもつい最近だ。

……確か。

そう、ISを動かせる『初』の男性ということで、メディアに取り上げられた男子学生用の機体だ。

公式には『初』の男性IS操縦者ということで、データを取る必要があるということで専用機が政府から渡される。

……ってことになつてているんだっけ。

だが、実際その機体を作つてているのは政府ではない。  
通信機越しの本人が言つたように、彼の専用機を実際に作つたのはISの生みの親でもある篠ノ之・束と愉快な仲間達だ。  
日本政府に色々と交渉を行つた結果、そうなつたことをアレックスは兄から聞いていた。

その交渉でも色々あつたのは、想像に容易い。

何せこちらからは交渉のプロフェッショナルである、戸田の姓を持つ青年が行つたはずだ。

アレックスは内心で思つた。絶対に泣きを見る結果になつたはずだ

……相手がつと。

同時に思つ。同じ境遇であるさずの自分は、そんな面倒、Jとこ巻き込まれなくてよかつたとも。

『そりか。その意味のわからない成分の戯言は無視するとして……問題は？』

『バッヂグー！…束さんと愉快な仲間達の仕事に問題なんか発生するはずないもんねーーー！』

『束、前にも言つたはずだ。一般人と違つて存在自体が非常識な君達が作る物は、製作者と同じく總じて非常識な物なのだと。つまり、問題だらけということだ』

『リツくんリツくん？自分もその一員だつて認識、ちゃんとある？』

『束。ジョークとは人を笑わす者だ。だが、君のそれは笑えない』

『えー？アツくんアツくん』

自分の名を呼ぶ声に、アレックスは返事を返した。

「なんですか？束さん」

『アツくんはどう思つ？リツくんつてぶつちやけどつち側だと思つ？』

『聞くまでも無いだろ？束。私は君達程愉快な思考回路を持つていな』

……持つてないつて断言するんじやなくて、程つて言つあたり、兄さんも染まつてゐると思つただけどなあ。

まあ、染まつてない自分には関係の無いことだ。うん。ひとアレックスは内心で納得し、取り合えず思つたままを口にしてみた。

「いや、弟の僕が言つのもなんだけど。リチャード兄さんも大概だ

と思つなか、僕」

『まで、までアレックス。それは聞き捨てならないぞ』

通信機の向こうから聞こえた兄の抗議の声に、アレックスは苦笑する。

『だよねーーやつぱりアツくんもそういう想つよねーー』

『いやだつて……』

言葉を区切り、アレックスは己の目で自分の体をまじまじと見た。自身が着込んでいる全身装甲のエスを。

従来のどれとも、それこそ各国で製作中の第三世代ともまったく違うレベルでの『飛行』をするこの機体を。

「そりでなければ、今僕は空を翔けていないし」

『ぐむ……』

『うんうん。その子が空を翔けているのは、リツくんの考えた装置のお陰だもんね!』

びことなく、嬉しそうにな束の声に、アレックスは心が温かくなるような錯覚を覚えた。

思つ。きっと自分達兄弟以外で、兄の作ったこの装置の完成を一番に喜んでくれた人は、他でもない彼女だと。

『……偶々基礎理論を考え付いただけだ』  
『そんなことないよ! あんな装置、普通の人なら発想すら出てこないよ!』

『そりだよ兄さん。誇つてもいいって』

『うんうん。さすがはリツくんだよ!』のT・P・Cの中でも抜き出た個性を持つてるだけのことはあるよね……』

『はははは。この変態供の集団の中でも抜き出た個性など、つまり  
ないジョークはやめてもらおうか束。常識人な私はこの集団の中  
はむしろ埋れる側だ』

……いや、兄さんも十分濃いと思うけどね。

『それに、それにだ束。私などより、君の方が余程個性的だ  
『えーー、そうかな?』

……束さん。僕も同感です。僕は貴女程キャラが濃い人を知りませ  
ん。

まあでも。

「どっちもどっちだよね。突き抜けて個性的って意味では  
『お前が言うな』  
『アツくんも人のこと言えないと思うけどなあ』

失礼な。

失礼な、まったくもって失礼な。  
確かに空馬鹿なのは自覚しているけど、兄さん達程キャラが濃わけ  
ではない。

そうアレックスが反論しようとしたところで、通信機の先から新し  
い声が聞こえてきた。

『そりゃ。あんたら三人と千冬の奴が、ここの中のキャラが濃い四天王さね』

自らを一括りにされたことに、アレックスは若干眉を細める。  
特にあの強さ的な意味で脱 人間しかけている人と同一視されたことに対する、だ。  
といふか。

「いやいや、ここの中の第一開発部の主任なんてやつてるサアキさんに  
言われたくないんですけど」

『そうだな。サアキ、君も君で中々に大概だ』

『あんたら兄弟も酷い男さ。あたしもうちの開発部も、あんたら程  
濃く無いよ』

『全身にモザイクがかかる『ハイパー モザイ君』なんてもんを作つ  
た開発部の主任の言葉じゃないよね』

そうそう。確かに作られた直後は、全身にモザイクがかかった人達が  
館内を徘徊してたなあ。

歩く18禁とか言って爆笑され、ちょっととした騒動になつたことを  
アレックスは覚えている。

覚えている。そう、覚えている  
何せこの騒動。何でそこまで覚えているかといふと、その後の鎮圧  
劇が問題だったのだ。

なんと、モザイク処理をかけて館内を徘徊してた馬鹿共を鎮圧して  
回つたのが、あの織斑・千冬だったのだ。

木刀片手に館内を駆け巡り、モザイクがかかった奴らを片つ端から  
血祭りにあげていったのだ。

木刀で殴られ、血まみれになつて千冬の足元で横たわったモザイク

をみたときは、スプラッター的意味で「8禁になってしまったかな」と思ったものだ。

『ふつ、束。我々第一開発部にとって、それは既に過去の栄光。今や局部的なモザイクを発生させる『ハイパー・モザイ君?』を鋭意製作中さね』

「うん。とりあえずサアキさんは自分の言動を省みるといふから始めた方がいいと思うんだ」

少なくとも、あんたは僕らを変態呼ばわりできる側にはいない。

『というか、どっだのサーちゃん? リツくんに何か用?』

『おつとそつだつた。どうしたもなにも、あんたを連れ戻しに来たんさ、束。ほら、さつさと行くよ』

『え! ? 待つてよサーちゃん! リツくん分はMAXまで溜まつたけど、もう少し余韻に浸つていいんだつてば! ! !』

『知るかいそんなん。もう白式の最終チエックに入るんだから、あんたがいないと意味がないさね。といつわけで、ほらほら行くよ』

ズルズルと、何かを引きずる音を通信機越しにアレックスは聞いた。恐らくは、サアキが束を連れ出そうとしているのだろうと、会話から予想を立てる。

首根っこでも掘んでいるんだろうか? と。

『ちよ、ちよっとサーちゃん! ウサ耳掘まないでよウサ耳! ! もげる、もげる! ! !』

……そつちか! !

確かにウサギの捕獲方法というか、捕まえた後の持ち方としてはあ

つていいかもしない。

でも、あの機械的なウサ耳を握るだなんてサアキさんも容赦無いなあ…と聞こえてくる束の声に、アレックスはぼんやりとそんなことを考えていた。

『偽者だらうがそれ。もげたところで意味なんて無いぞ』

『私の個性を否定しないでよーーー!!』

『やつすい個性だなあ。つーか、あんたはそんなんなくとも十分個性的さね』

『サーちゃんまでそういうのと聞つーもう、リックくん!!…フォロー！束さんにフォロー頂戴！…』

『だが断る』

『うわ最悪ー最悪ですよこの人ーーでも許しちゃうー束さん、相手がリックくんだから許しちゃうよーーー』

『それは、それはありがたいな。といつわけであつたと連れて行けサアキ』

『はいはい』

『痛ーだからサーちゃんもうちょっと優しく引っ張つてばーーーあ、じゃーねーリックーーん。また来るよーーー』

最後まで能天気な明るい声をだし、束はサアキに連れて行かれただが、まだ何か騒いでいるのだろう。通信機越しでも、廊下の奥から束の声がまだ聞こえる。

……本当に、台風みたいな人だなあ。

ため息を吐く兄の声を聞きながら、アレックスはそう思つた。

『まつたく……相変わらず疲れる奴だ』

言葉通りか、少し疲れた声をリチャードは通信機へと向かって述べた。

通信機の先、今や空と海の間で飛んでいるアレックスは、リチャードからの声に苦笑し、答えた。

何時ものことじゃないか……つと。

「それに、あの騒がしさこそT・P・C・つて感じがするけどね」

『あの馬鹿と同じノリの奴が集まつただけだ』

「あははは……そうだね。頭がハッピーな人ばかり集まつたもんね」

でも、つと、アレックスは胸中で思う。はじまりは兄さんだけどねつと。

この集団の始まりは、兄と束の一人からだつた。

兄の研究を知つた束が強襲し、殴り合い寸前の口論にまで発展し、その後何故か二人共同で作り出しがたのが、切欠だ。

何時の間にか色々な人が噂を聞きつけ一人にコンタクトを取り、一緒に研究する人数が増え、気が付いたらこの集団になつていた。本当に、人生何が起こるかわからない。

「ねえ、兄さん」

『なんだ、なんだ？アレックス』

「今さ、楽しい？」

『』

問い合わせに、沈黙が降りた。

通信機から静寂が続き、10秒程立つてから、声が聞こえる。

『そう、だな。楽しい……ああ、楽しいのだろうな。今が『  
「そつか」

うん。そつか。それは…

「僕と同じだね」

そして、兄と同じ思いを持っているのが嬉しいと、アレックスは思つた。

『時々ノリについていけなくて疲れるがな』

「うーん。僕が思うに兄さんも結構ノリノリだと思つけどなあ。ほら、兄さんも結構大概だし」

『よしアレックス。今度兄弟水入らずで語り合おう』  
「のーさんきゅー」

『残念だが強制イベントだ。ん?』

アレックス

何?つと、アレックスは聞く。

兄の声に、少しだけ鋭さが出たからだ。

『ああ、今日の、今日の遊び相手がそろそろ近づいてきたぞ』

直後、顔の横に半透明のサインフレームが出現した。

衛星からの情報なのだろうか。海しかみえないこんな場所で、三人の女性が空を飛んでいた。  
ISを身に纏つて、だ。

「訓練相手つて言おうよ兄さん。そりやあ、向こうは護衛でアボなんかとつてないけどさ」

『訓練などと言えるものか。ならば、ならば聞くぞアレックス』  
「なにを？」

アレックスの問いに、リチャードは答える。  
自らが手がけた機体への自信とそれを操る相手への信頼を混ぜた力  
強い声で、だ。

『ただ空を飛んでいるだけの人間が  
ことなど、できると思うか？』  
「どうだううね。ま、答え合わせはこの後にしよう』

明確な回答をせずとも、アレックスの声は軽かつた。  
喜悦が見える。ただ翔けるのも好きだが、こりして誰かと競い合う  
といふことも、彼は好きだった。

「じゃあ、準備をするよ」

言つて、翔けること止めてアレックスは口の正面にサインフレーム  
を展開した。

サインフレームには画面の左側と右半分を占領し、彼が操る機体の  
名と彼自身の全体像が現在の損傷率を表す数値と共に表示されてい  
る。

残る右半分には、現在機体が所有している武装と後付の特殊装置の  
名称が表示されていた。

その一つを、アレックスは選択する。

「それじゃあ、展開

直後、黒い靄が彼が身に纏つていた青と白の全身装甲へと付着する。  
展開が完了すれば、元の色が完全に隠れ、そこには黒い人型の何か

しかいなかつた。

「うーん……まさか『ハイパー・モザイ君』にこんな使い方があつた  
なんて」

『黒靄仕様に変えたのは私だがな』

「そりだよね。全身モザイクだつたら……相手の目が疲れそうだよ  
ね。僕も嫌だし」

『それで、それでいいアレックス。お前が乗り気だつたら、常人へ  
と戻すために反省の儀を実行するところだ』

「うわ。それは怖い」

おどけた口調で言いつつ、アレックスはサインフレームをさらに開  
く。

表示された複数の窓、それら全てに問題無しの意味を表す表記がさ  
れているのを確認し、閉じる。

「よしひ

確認すべき点を全て終え、アレックスは大きく息を吸い、吐いた。  
そして首上げ、空を見上げる。自分のいる位置よりも高い、空を。  
ああ、今日も良い空だ。そう想い、フルフェイスの頭部装甲の中で  
瞳を閉じる。

「T・P・C・所属テストパイロット、アレックス・サンダーソン。  
所有機体、サンダーフェロウ」

告げる。自分自身に、通信機越しにいる兄に向かって。

「これより、一方的な模擬戦を

「

そして、田を開き、正面を見つめ、

「  
開始します」

加速した。

速く、何物を追い抜いていくよっこ、ただ速く。

## 1：空馬鹿と愉快な仲間達（後書き）

オリ主?なアレックス。一人称は僕、我輩ではない。

## 2：一方的な戯れ -1

雲一つない晴天の空の中を、ゆっくりと進む影があった。

人型の機動兵器、三機のT.S.だ。

先頭に一機を置き、その左右の後方に一機ずつでの基本的な三機小隊でのフォーメーションを組み、空を飛んでいた。

先頭の一機は純日本製の量産期『打鉄』だ。

武芸者を彷彿する銀灰色の打鉄の売りは、その安定した性能による近接攻撃にある。

刀や槍などのこれまた日本製の武器がメインであるためか、総じて操縦者の武芸力を必要とする機体もある。

その後方には、打鉄とは違う同機体が一機並んでいた。

デュノア社製の第2世代型T.S.『ラファール・リヴィア・イヴ』だ。

ネイビー・カラーのラファール・リヴィア・イヴは打鉄に比べ武装が多い。装備を変えることで様々な状況に対応することができる汎用性の高い機体だ。

特に射撃関係の武器が多彩であり、主に扱う個人の射撃スタイルに合わせた銃を装備する。

そんな一機で組まれた小隊が、大空の下を飛んでいた。

『暇ですねー。本当に』

『やめる。口に出してそういうことを言つてフラグのように思えてならん』

三人小隊の隊長であり打鉄を操るa<sub>1</sub>は、己の左後方で飛び軽口を叩いたラファール・リヴィア・イヴを操るa<sub>2</sub>へと注意を促した。

だが、a<sub>1</sub>の注意にa<sub>2</sub>の横に飛んでおり、a<sub>2</sub>と同じラファール・リヴィア・イヴを操るa<sub>3</sub>が呆れながらも言葉を繋げる。

『a1、フラグとか言つてゐる時点で駄目な気がします……』

『つか、その考え方自体があれですよね。ゲーム脳乙』

『お前ら、本当に對して辛口だよな』

『いや、今は任務に乗り気でないだけツス。

公共施設の完成式典だかの護衛で出撃される意味つてあるんスか  
ー?』

『抑止力的な意味でな。

ISで護衛しているんだから、下手なことをせつても直に鎮圧されるぞ、と見せ付けてるわけだ。

それともあれか? お前は海上よりも会場の警備の方がよかつたか  
?』

今この海上での警備を行つてゐる彼女達は自衛隊に所属するIS乗りである。

コアに限りのある「ISは、各国家」としてその数を割り振られており、無駄に遊ばせておく余裕がない。

その多くは次世代機用の為のテストに使用される。

しかし、ISとは国の防衛上の要でもある。

その為、何機かはこうして軍 日本の場合は自衛隊 に配置され、有事の際には抑止力として使用される。

『同じ音ですけど、後者は真つ平ゴメンですわー。堅苦しいのとか  
マジ簡便』

『私も同感だ。だつたら文句を言わずに飛んでいひ

注意を受けたa2はへいへいと生返事をし、それを聞いたa3が控えめにクスリと笑う。

『まあまあ我慢しましょうよ。これが終われば休暇なんですから』

『そりだよな。a3は休暇になつたらどうするん?』

『ええ、近くの小学校が運動会を開くんで、父兄に混じつて可愛い男の子達を観賞してきます』

『堂々と言つたなショタコン。何時か捕まるぞ』

『ショタコンじやありません、生命礼賛型です。

それに触りませんから大丈夫です。NOタッチは基本です』

『あたしも早く帰りたいですわー。

この前見つけたバーのマスターが凄く燻し銀の叔父様で最高なのがさあ』

好き勝手に自分の趣味…というより性癖を暴露する一人に対し、a1は「ハア…」とため息を吐いた。

思う。どうして内の小隊のメンバーは「いつも癖が強いんだろうか。ショタコンにオジコンとか特殊すぎだうに」、つと。

『お前らはいいよな。超がつくほど自分に素直で。毎日が幸せだらう?きつと』

『イケメンの幼馴染をゲットしたリア充に言われたくないです』

『しかも職場一緒で、旦那に整備してもらつた機体を使つてるとかね』

『なんだよー。別にいいじゃないかよー。

悪いかよー。あいつに整備してもらつたのが一番馴染むんだよー』

唇を尖らせぶーたれるa1を、a2とa3は若干白い目で睨む。

二人はa1の小隊に所属しているだけあり、a1とその旦那がいちやつく様をよくよくみせつけられるのだ。

彼氏が居ない一人身であるにも関わらず……

『爆発してください』

『爆発した方がいいですよ』

『 酷い奴だなー お前、り』

『 a<sub>1</sub>も色々自覚した方がいいと思います。……それで、a<sub>1</sub>は休暇をどう過すんですか?』

『 ああ、あいつと一緒に休暇をとる予定でな。』

『 取り合えず、この任務が終わったらどこに行くか相談するんだ』

『 あ、コレ絶対フラグ立ったよね』

『 おいおい、不吉なこと』

』

そんな、女三人寄れば姦しいの言を表すような雰囲気の中、急にa<sub>1</sub>に対して通信が入った。

『 ロールの音は仲間内のI.Uからの通信ではない。』

本部からの指令の音だ。

a<sub>1</sub>はハンドサインで直ぐにa<sub>2</sub>とa<sub>3</sub>に黙るよう指示をだし、本部からの通信を受信した。

『 JからB a s e 1、瓶割り小隊へ連絡』

『 Jから瓶割り小隊隊長a<sub>1</sub>。なんでしょうか?』

『 所属不明機が一体、そちらの空域に接近中です。対処を

願います』

通信の内容に、a<sub>1</sub>の頬に一筋の汗が流れた。  
何せ、本部からの通信はこの怠惰とも言える操縦の終わりを告げ、異常事態へと変える一言だったのだ。

己の左右から向けられる視線に、a<sub>1</sub>は少々泣きそつた声を上げた。

『 a<sub>1</sub> ……』

『 あーあ ……』

『 な、なんだよー。私のせいだとでも言つのかよー』

通信を受けた瓶割り小隊は、指示を受けた領域へと急行した。本部から送られてくる情報を元に現場へと辿り着けば、ISの拡大された視野の遙か彼方より、こちらに移動してくる一機のISが確認できた。

『あれが問題の所属不明機か』

『全身真っ黒…… a1、あれって噂のやつですかね？』

『そうか？ a3、私が聞いた話では全身真っ赤の目に厳しい色だと聞いたぞ？』

『私は全身真っ青の超保護色だって聞いたっスよ？』

『…… 単一色だってのは変わらないんですけど、なんでもまたそんな色にバリエーションがあるんですかね』

『趣味なんじやね？ 相手の』

『うわ…… そんなのと今から戦うんですか？ 私達』

『言つな a3、これも仕事だ 上がつてろ』

『了解』

軽口を叩きつつ、瓶割り小隊はそれぞれの配置につく。

a1とa2はそのまま前進し、a3はa1の指示通り上空へと上がる。

それぞれが先ほど通信で決めた位置へとつけば、a1はa3へISのコアネットワークを通じて相手の位置情報を渡した。

相手の受信を確認し、サインフレームを開いて一つのツールを選択する。

瞬間、a1の手に拡声器が現れた。

『緊張感ないなー』

『仕方ないだろー。警告にはこれ使えって決められてるんだからよー』

『いや、確かに拡声させた声に指向性を持たせたりとか、かなり性能いいのはわかりますけど……見た目がちょっと』

『a2、作ったIAIに文句を言つてくれ』

それだけ言つと、a1はさつさと仕事を始めるべく拡声器のスイッチを入れた。

キィィィンと一瞬耳障りな音が聞こえ、思わずa1は顔を顰めるが、すぐに取り直し拡声器へと口を近づけた。

『あーあー、ただいまマイクのテスト中。ただいまマイクのテスト中。』

a1はa2から向けられる微妙な視線を無視し、言葉を繋げた。

『所属不明機へと警告する。』

貴女のIASはまもなく日本領空に入ると同時に、領空侵犯となる。領域侵犯を犯した場合、当機は国際IAS条約に基づき迎撃処置を施す用意がある。

ただちに進路を変えられだし。繰り返す…』

二度三度と、a1の口から領域侵犯における迎撃処置への警告が言い渡される。

だが、所属不明の黒い靄に覆われたIASは聞く耳持たないとばかりに進んでくる。

その様子に、a1は一人ため息を吐いた。

ああ、面倒なことになつた…つと。

『警笛はしたが聞き入れて貰えない』よつだな…………』

a<sub>1</sub>はa<sub>2</sub>へと田配せを行い、気が付いたa<sub>2</sub>は領きを持って答えた。

a<sub>2</sub>の両腕にアサルトライフルが展開され、a<sub>1</sub>の左手にも量子交換から復元された槍が現れる。

ISのハイパー・センサーの端では、a<sub>3</sub>が狙撃銃を構えるのを、a<sub>1</sub>は確認した。

『ならば、』

行くか。と拡声器ではなく、a<sub>2</sub>とa<sub>3</sub>との通信にて声を出す。あいさつと、了解つと、一人からそれぞれの返事を聞き、a<sub>1</sub>は拡声器へと言葉を載せる。

『これより撃墜させて頂く』

攻撃の意思を持つた言葉が放たれた瞬間、呼応するように大空の下に発砲音が響き渡った。

a<sub>3</sub>はa<sub>1</sub>からの指示に従い、上空から射撃を行った。

場所は、所属不明機がいる場所よりも、そしてa<sub>1</sub>とa<sub>2</sub>がいるよりも遙上空からだ。

それは偏に装備の違いによるものである。

a<sub>3</sub>の装備は、制空用の名に恥じることのない、制空圏を取得するための長距離射撃用装備だ。

機体は量産型 IISの中でもシェアが高い、デュノア社製のラファール・リヴィアイヴを使用。

量子変換された様々な遠距離射撃武器を持ち、相手を近づけに制圧する射撃を主に行う。

三機小隊の場合、a<sub>3</sub>がまず行うのは相手の認識外からの狙撃だ。a<sub>1</sub>及びa<sub>2</sub>に敵の注意を引きつけ、その隙に一撃を放り込む。

故にa<sub>3</sub>は構えるのは狙撃銃だ。

今a<sub>3</sub>が持つ長距離射撃用の武装は、日本企業であるIAI製の大

型狙撃銃

徹神丸。

全長2m程の長さを持つその狙撃銃の最大の特徴は、その威力にある。

1km圏内であれば、相手のシールドを貫通した上で、絶対防御にまでダメージを与える威力を持つのだ。

それを、a<sub>3</sub>は所属不明機へと向ける。

スコープから目標を覗き込み、海面より少し高い位置で飛行を続けるその相手に目掛け、発砲する。

IISの演算機能と、a<sub>3</sub>の操縦者が持つ射撃の腕により、放たれた弾丸は所属不明のIISへと直進する。

だが、

「あつ  
！」

放たれた弾丸は対象に直撃するでなく回避され、海面へと水しぶきを立ち上げた。

見る。スコープの向こう側で、変わらない姿のまま飛び続ける黒い靄を纏つたISを。

その姿を確認し、次弾を装填して狙いをつけ、トリガーを引く。

発砲音。

「また！？」

しかし、弾丸は目標には命中せず、再度はずれる結果となつた。a3はみた。スコープの先、敵は体を少しだけ傾けただけでこちらの弾丸を避けたのだ。

「ならー。」

リロードを行い、高速で移動する敵に再度照準を合わせる。

敵……そつ、敵である黒い靄を身に纏つたISへ向け、三度目の発砲。

続けて、次弾を瞬時に装填。

一発で見た敵の回避行動を元に、回避先と思える空間へ銃弾を放つ。放つた直後、直進する三発目の弾丸を敵が避け、

「よしー！」

予想通りの場所へと、敵が移動する。

そこに既に放つた四発目の弾丸が敵へと直進し

「げつー？」

避けられた。くるりと体を回転させ、まるで身体に掠らせるよう、元の位置へ戻る。

避けたのだ。

銃弾を意図して避けるなど、生身で行えば超人の域に達する芸当。だが、ISにはハイパーセンサーがある。

縦者の知覚を補佐し、目視すらできない遠距離や死角を補う万能のセンサー。

けれども、それはあくまでセンサーだ。

ただの情報であり、実際に動き回避するのは人の業。

相手はハイパーセンサーからの情報を的確に受け取り、有効に活用した。

そして、最小限の動きでこちらの弾丸を意思を持って回避してみせたのだ。

だから、a3は判断する。相手は強者であると。たかが四発。

だが、スナイパーの銃弾を難なく回避して見せたその技量を認め、a3はa1へと通信を繋げる。

『敵、予想以上に避けるの上手なんんですけど…』

『a3。あてれそうか?』

『ガチだと無理ですよ。』

二つ矢……いや、二つ弾ですけど、一発目を体に掠らせるようつ避ける相手ですよ?』

『半端ないわー』

a2の若干緊張感に欠ける声に、a3は一人頷いた。

『あれですよ。未来線でもみてるんじゃないかつて思つちやいますつて』

『あー、あつたね。そんな漫画』

『無駄話はそこまでにしどけ

a3』

『はい』

『突つ込む。意識を逸らしてくれ。a2はフォローを頼む』

『了解!』

『はいはーい』

a1からの指示を受けたa3は「了解」と声に出し、徹神丸へと弾丸を再装填する。

スコープから相手の所属不明機を覗き込み、少々狙いを甘くして引き金を引く。

だが、発砲された弾丸は先程の焼き増しのように回避される。

a3は構わず次弾を発砲。回避、さらに発砲、回避、発砲、回避。

撃ち戻したa3は再び弾丸の再装填を行いつつ、a1とa2を確認する。

二機の位置は、高度を同じくして所属不明機の前方にまで進みつつあつた。

既に互いに相手を肉眼で確認できる距離。

a1とa2も、そして所属不明機も自分の正面から相手が来るのを確認できる距離。

それを確認したa3は、墜落と判断し、a1に通信を贈る。

『田隠し作ります』

『頼む』

それだけ伝えると、a3は徹神丸による射撃を再開する。

1発目、右に動いて回避される。

2発目、狙いが少しずれたためか1発目よりも少ない動きで回避される。

3発目、大幅に狙いがずれ、回避されることなく海面へと着弾する。

4発目、3発目同様、所属不明機は回避運動を取ることなく、弾丸は海面へと着弾した。

その瞬間、

「よつ」

a3は一瞬で武装を換装した。

徹神丸を瞬時に量子変換することで格納し、それと並行して一つの武器を具現化する。

グレネードランチャー。

弾丸は一発だけだが、直撃すれば一発で撃墜すら可能な超火力武器。それを、

「てい」

放つた。

だが、直進するグレネード弾は所属不明機へと向かいはしない。

徹神丸の3発目と4発目同様、目標を大きく狙いを外れて直進する。そして、

「！？」

放たれたグレネード弾は、所属不明機の前方に着弾する。結果、爆発音と共に大きな水柱が作られた。

## 2：一方的な戯れ - 2

直進していた所属不明機は、目の前に出来上がった水柱に回避行動を取らず、停止行動を取った。なにせ、そのまま直進すれば水の壁に激突することになるのだ。そうなれば当然、シールドを抜け絶対防御にまでダメージが浸透するの明瞭だつた。

故に、

「

停止した。

ある程度のスピードを出して直進していたにも関わらず、重力や慣性を無視するかのように、その場でバク転して止まつたのだ。

「.....」

移動の余韻すら残さず、所属不明機は停止する。だが、

「！？」

次の瞬間、所属不明機は上空へと身を動かした。そして、一瞬遅れて水柱の横から影が躍り出た。

「

疾！！」

立ち上がつた水柱の横から、十字槍を手に持つたa1が回転しながら

ら攻撃を仕掛けってきたからだ。

槍のリーチを活かした横薙ぎの攻撃は、所属不明機が上空へ逃れたことで回避される。

そこに、

「つーーー！」

狙撃銃による援護射撃が行われた。

a3だ。弾丸はa1の攻撃同様、所属不明機が直前に気がついたことで回避される。

だが、それでよかつた。

a3の間隙を狙つた射撃は、所属不明機の動きを阻害する意味が大きい。

「どうも。銃弾のテリバリーにやつてきました」

声と共に、射撃が行われた。

a2だ。所属不明機の上空より、両手にアサルトライフルを持ち、弾幕を持って攻撃を行う。

a1の初撃とa3の援護射撃。

それによって回避行動を取つた所属不明機へ弾幕を行う連携攻撃。だが、

「

所属不明機が迫り来る弾丸へ向けて手を突き出す。

その手に銃弾が直撃する

こともなく、a2が放つた弾

丸は所属不明機を逸れ、海面へとぶち当たつた。

直撃するかと思われた a<sub>2</sub>の攻撃が外れたことに、a<sub>3</sub>は通信内で声をあげたのを、a<sub>1</sub>は耳した。

『防がれた！？透明な盾とかですか！？』

『いや違う！弾丸は逸れていった！！衝突していない！つまり、あれは物理防御じゃない！！』

a<sub>2</sub>よりは遠くにいたが、それでも a<sub>1</sub>は目の中で起こった事象を把握していた。

直進していた a<sub>2</sub>の放った弾丸は、所属不明機に直撃するかと思われた瞬間、逸れていったのだ。

物理防御でもない防御手段。それが表すのは一つ。敵が、所属不明機が第三世代 IS である可能性が非常に高いということだ。

『特殊兵装？』

『やっぱ第三世代ですかね？』

『だろうな。だが

』

a<sub>1</sub>は視界に所属不明機を捉え一呼吸を行なった。

a<sub>2</sub>もまた銃の照準を所属不明機に向いていることを確認し、味方を叱咤するべく言葉を作る。

『その昔、偉い人は言つた。ISの性能が、戦力の決定的な差でないと』

『ガノタ乙』

『a<sub>1</sub>……本当に好きですよね、そういうの』

『いいだろー別にー』

好きなんだからよーっと、言い、a<sub>1</sub>は十字槍を構え、

『まあ、戯れはこの程度にして

仕掛ける』

直進する。その後方にa<sub>2</sub>が続くのを確認したa<sub>1</sub>は、両機へと通信を行う。

『初撃は私が、その後は何時も通りa<sub>2</sub>が獵犬になってくれ。

私は隙を狙つてでかいのを当てる。a<sub>3</sub>、援護は任せたぞ。

特殊兵装は咄嗟の状況に弱い。搦め手を含めて、どんどん行くぞ

『こっちに当てないようになー』

『そつちこそ、a<sub>1</sub>を撃たないよつとしてくださいね』

『……それもありかね？』

『おおーー。真面目にやうんかお前ひ

言いつつ、a<sub>1</sub>はa<sub>2</sub>を置いていくように加速した。

十字槍を突き出したまま構え、相手へと突撃するのは槍系の最大威力を持つ突撃攻撃だ。

愚直なまでに進むその攻撃は、当たれば相当のダメージを『』れる。

「…………」

だが、反面よけられやすい。

『ひつー』

方向修正が行えない範囲にまで迫られた瞬間、所属不明機がその高度を一気に落としてたことで、a<sub>1</sub>の一撃は回避された。

頭上を通り過ぎる  $a_1$  は隙だらけとなる。

だが、そこに  $a_2$  と  $a_3$  のフォローが入った。

$a_3$  の狙撃が敵の次の行動を止め、 $a_2$  が  $a_1$  に続いて所属不明機へと襲いかかる。

しかし、行動は所属不明機の方が早く、そして速かつた

『こなくそ！』

叫び、弾丸を撒き散らしながら  $a_2$  は追いかける。

$a_3$  の攻撃で一気に高度を上げた所属不明機を追いつき、 $a_2$  も同様に高度を上げるべく動いた。

4枚の多方向加速推進翼。内2枚を上空へ向け、残り一枚を前方の推進に当てる。

結果、得られる軌道は斜め上へ進む形だ。

$a_1$  の後を追っていた  $a_2$  にとっては、所属不明機の動きを一步引いた位置で見れたから、読みの動き。

進みつつ、 $a_2$  は右手に持っていたアサルトライフルの引き金を絞つた。

所属不明機が射線上へと近づいたからだ。

「！！」

連続した発砲音と右手に銃を撃つた反動を感じつつ、 $a_2$  は射撃を止めず加速する。

$a_2$  の撃つた弾丸が、所属不明機と交差した。だが、被弾は無い。瞬間、 $a_3$  の援護射撃が入るが、これも同様に回避される。

所属不明機は身を回すと、そのまま仰向けで

急降下を行つた。

それを、 a<sub>2</sub> が追う。

4枚の多方向加速推進翼、それぞれの停止と噴射を持つてその場で前周りを行つた。

それだけでない。 a<sub>2</sub> はうつ伏せになつた状態を維持し、推進を全て真下に向け加速する。

それは、仰向けになつている所属不明機とは逆の姿勢だ。敵を、所属不明機を正面に置き、 a<sub>2</sub> は叫んだ。

「どつせーい！…！」

両腕のアサルトライフルの引き金を引き、容赦なく銃弾をぶち込む。打ち出される数多の銃弾が、敵を穿つため突き進む。だが、それらは所属不明機が手を前に突き出すことで全てが逸れていく。

不可視のフィールドが、 a<sub>2</sub> の放つた銃弾を拒絶したのだ。

「なんだよくそーーーー！」

a<sub>2</sub> が己の攻撃が敵に届かなかつたことに文句の声をあげる。

そして、続く動きで両手のアサルトライフルを放り投げるよう量子変換した。

続く動きで出現するのは、狙撃銃でもなもアサルトライフルでもなくショットガン。

それを、所属不明機へ向けて発砲する。

だが、結果はアサルトライフルと変わらない。

放たれた銃弾は不可視のフィールドに逸らされ、直撃にはならない。そこに、

「 ！？」

十字槍を構えたa<sub>1</sub>が、 踊り出た。

a<sub>1</sub>はa<sub>2</sub>とa<sub>3</sub>が攻撃の最中、 大きく弧を描くように所属不明機へと接近していった。

そして今、 敵がa<sub>2</sub>の射撃を上から受け終えた瞬間を狙い、 斜め下から攻撃を行つたのだ。

行う斬撃は、 擦れ違いざまの攻撃。 右斜め下から左上への振り上げだ。

敵は今上へ、 a<sub>2</sub>へ向かつて手を突き出している。

それは先程のまで戦闘で判明したのは、 敵の防御術ということだけ。 だが、 手を射線へ向けていることから、 手を突き出した方向にだけ有用なフィールド系であると、 a<sub>1</sub>は判断した。

故に、

……背後からの、 手が向いていない方向からの攻撃は流石に防げまい！！

思い、 考え、 攻撃に意思を込めるべく叫んだ。

「ハイダラー——！」

突き進む意思を持ち、 加速する。

狙うのは敵の腰部分。 胸体部の中央であり、 一番狙いややすい位置だ。

十字槍を持つ手を今一度握り閉め、擦れ違いざまに槍を振り上げた。だが、

『外した！？』

槍の一撃は、敵の行動によつて避けられた。

見る。敵が、仰向けになつていた敵の姿勢が変わつてゐるのを。視界の隅では、敵は今丸くなつてゐる。

体育座りをして、膝を頭につける、そんな感じだ。

つまりは、

『投げ出していた四肢を曲げ、その場で回つてみせたといつのか！？』

よつするに、敵は空中で後ろ周りを行つたのだ。

動きが続く。足を頭上の方へと放り投げ、それに釣られる動きで背が動く。

放り投げられた足は途中で伸び、体全体がそれを追いかけ、a1との距離がとれ、続けて入るa3の狙撃まで回避してみせる。

『なんとかあの新体操の動き、どんだけあの装甲柔らかいんだつーの』

『いや、まあ、ISの場合絶対防御がありますから、盾でなければ装甲の厚さの意味微妙ですしねえ』

『しかし、あんな回避されたのは初体験だよ』

『そりやああんな回避行動、普通はとらないですよ』

『ちなみに、a1の初体験つて何時頃だつたんですか？』

『そうだなー。あれは高三のクリスマスの深夜だつたなー。』

ベランダからこつそり忍び込んで、あいつの部屋で一人だけのクリスマスを過してゐた時に……つて何を言わせるんだ、おい』

『リア充死ね』

『いや、この場合は過去なわけですし、微妙に違いません？

……ああ、でも今は彼氏から旦那にして幸せ一杯状態なわけです

から、あつてるのか』

『お前ら働け。見ろ、所属不明機の奴、こっちがしかけてこないのを見て小首傾げてる ぞ！』

言いつつ、a-1は再び翔け出した。

## 2：一方的な戯れ - 3

瓶割り小隊と所属不明機の戦闘は続いていた。

追い駆けつこのように、右へ左へと空を翔る所属不明機を追う a<sub>2</sub>。だが、a<sub>1</sub>の斬撃も a<sub>2</sub>と a<sub>3</sub>が撃つ弾丸も、敵を捉えることはできていない。

厄介なのは、所属不明機の持つ不可視のフィールドだった。

軌道を変える。

それが、瓶割り小隊の隊員達が出した結論だ。

a<sub>2</sub>や a<sub>3</sub>が放つた弾丸は、その悉くが逸られ、海面や空へと散つていった。

a<sub>1</sub>の放つ斬撃も、同様だ。

十字槍での凧ぎや連続刺突も、そのフィールドの効果に阻まれ、クリティカルを出していくない。

だが、所属不明機の一番の厄介な点はそこではない。

相手の機動だ。敵は瓶割り小隊の攻撃の殆どを回避しているのだ。ハイパー・センサーの恩恵で死角というものが無くなつた。

そして、陸上では無いが故に、ISという機械を用いることで人の動きを超越した機動が出来るよつになつたのだ。

それらを駆使し、所属不明機は空を翔けていた。

鳥よりも速く、上手く、自由に翔ける。

手玉に取られるよつに、瓶割り小隊の攻撃は所属不明機に当たらな

い。

何よりも、

当たらない。

『だーーー！敵の動きが速い！』

『どういう動きだあれ。タメが無いぞーーー。』

所属不明機の機動には、IS特有の動作のタメが無いのだ。動作のタメ……それは方向転換や緊急回避後に発生する一瞬の隙だ。反重力を用いての浮遊。方向転換による強弱の再設定、加速による推進の変化。

それらを、PICOという画期的なシステムが行っているからこそ、ISは空を飛ぶ。

そして、今までの動きを消し、新しい動きを創る。その消去と作成の隙間。

移動から停止、停止から移動方向へ進むだけのエネルギーが放たれるまでの僅かな間。

それが、タメだ。

『さすが第三世代：つてことなんでしょうか？』

『いや、第三世代のコンセプトは特殊兵装の充実だ。』

確かに第一世代と機体性能に差はあれど、あの動きはおかしい

確かに操縦者の腕によっては、限りなくゼロにすることも可能だ。動きを連続させることでタメを分散させたり、方向の向きを調節することでタメ事態を次の動作に繋げる人もいる。しかし、それらはゼロではない。

どんなに上手な乗り手であっても、ISを動かしている以上必ず発生するのが、動きのタメだ。

だが、所属不明機にはそのような動きが一切見れない。

『ならあれば、第二世代故の性能ではなく、敵の特殊兵装によるものだと?』

『その可能性が高い。だが、あれはまるで……』

そり、まるで、まるでだ。

違つ理の上で動いている……そんな錯覚を、a<sub>1</sub>は覚えた。

『いや、何にせよ。やることに変わりは無い。』

『ですね、やることに変わりはないですもの』

『そういうことัスね……』

『ああ、だから

ちょっと無茶をしてへる』

『あいあい』

『了解、援護します』

瓶割り小隊が再度構える。

「……………」

所属不明機もまた、釣られるように腕を伸ばし、両者は再び接敵した。

構えた瓶割り小隊から、まずはa<sub>1</sub>が飛び出した。

十字槍を下段に構え、青の空を疾駆する。

それに続くのはa<sub>2</sub>だ。

右手にアサルトライフルを、左手にショットガンを持ち、a<sub>1</sub>の後を追いかけるように飛行する。

そして、

『撃ちます！』

遙か上空から、徹神丸を構えたa3が所属不明機へと狙撃する。弾丸は寸分の狂いもなく所属不明機へと向かうが、それらは全て半歩体を動かしただけで回避される。

だが、敵は動かない。まるでa1やa2が来るのを待つかのように、動かない。

そして、a1との距離も段々と近くなり、

「だーーーらしゃーー！」

踏み込みの速度を持つて、a1が十字槍を突いた。

それを所属不明機は不可視のフィールドでなく、その手甲を持って阻害し、狙いをはずさせる。

a1の攻撃も、止まらない。

移動の速度を全て乗せた一撃は避けられた。

だが、動きに続きがある。

外れた十字槍を引く動作にあわせ、敵、所属不明機へとa1は右蹴りをぶち込む。

下段からの蹴り上げは、相手の脇腹を狙つたものだが、それもまた所属不明機の手によつて防がれる。

「はつ！」

だが、止まらない。

防がれた蹴りに体重を乗せ、起点とし相手の横に飛ぶために動く。動きの中、手の中にある十字槍もまた同時に振るつた。

相手の首を狙う動きは、所属不明機がスウェーの動きを見せること

そこで、  
a1は所属不明機の横に移動してみせる。

a2がショットガンを突っ込み、所属不明機の至近距離で発砲

「げつ！」

だが、それもまた妨害される。

敵のサマーソルトが、a2の持つショットガンの銃口を蹴り上げて  
いたのだ。

を見せた。

まだ！

右手に持つアサルトライフルを撃とうと、前に突き出したのだ。  
しかし、それもまた失敗に終わる。

素早くサマーソルトを行つた所屬不明機が空中で姿勢制御を行い、  
a<sub>2</sub>の持つアサルトライフルの銃口に横蹴りを食らわしたからだ。  
衝撃に、銃口を横に向けたa<sub>2</sub>の持つアサルトライフルが爆発する。  
a<sub>1</sub>のいる方向に、だ。

『どわあ！？何をするか？！』

『すんませーん、敵に銃先変えられちゃいましてー』  
『うわ、その間延びした言い方がムカツク』

通信でそんな軽口をしつつ、a<sub>1</sub>はa<sub>2</sub>のフォローに前に出た。

所属不明機と a<sub>2</sub>の隙間に向け、槍を突っ込み、

『引け！ a<sub>2</sub>！』

そして、敵側に向かつて屈いだ。

それも先程と同様、スウェーによつて回避される。

だが、a<sub>1</sub>は空を切つた十字槍を手の動きで回転させ、所属不明機へ向けて連續攻撃を仕掛けた。

十字槍が、空氣を切る音が響く。

上段からの振り下ろし、十字槍の右側の相手の腹に突き刺すような動き。

だが、また場面の焼き直しが起きた。

スウェーをその場での回転へと繋げた所属不明機のサマーソルトが、今度は十字槍の鉄部分を蹴り、狙いをずらしたのだ。

「ちつ！」

衝撃に、a<sub>1</sub>の体は前のめりに流れてしまった。

連撃がこれ以上行えないと判断したa<sub>1</sub>は、舌打ち一つし、蹴り抜かれた側へと体を側転させる。

そこに、a<sub>1</sub>と入れ替わるようにa<sub>2</sub>が前に出る。

動きは先程のa<sub>1</sub>とのスイッチに似ていた。

だが、a<sub>2</sub>の手には射撃武器は無い。あるのは小ぶりなナイフが一本。

それらを逆手に持ち、相手へと接近しようと前に出で、

「やつぱ止めた

軽い口調。

相手にも聞こえるように、拡声した肉声の弦きと共にその場で急停

止する。

そして、『』の両肩にあるものを召喚した。

短筒だ。

だが、その筒の中は空でなく、中身があり、それはミサイルと呼ばれるものだった。

### 「プレゼントフォーゴー」

召喚直後、狙いなど付けずに a<sub>2</sub> はただ前方へと発射した。ミサイルが突き進む。所属不明機は距離を取ろうと後ろに下がろうとした、

「！？」

その場で体を捻ることで、その一撃を避けた。来たのは弾丸だ。

それも背後から、胴体の真ん中を狙つた不意の一撃。放つたのは a<sub>3</sub>…… a<sub>1</sub> と a<sub>2</sub> の攻防の最中に移動し、ポジションを変えていたのだ。

だが、その位置は危険もある。何せ a<sub>2</sub> との対面にいるからだ。下手をすれば、フレンドファイアに成りかねない位置。現に a<sub>3</sub> の放つた弾丸は、所属不明機に当たらなければ a<sub>2</sub> へと直撃する軌道だ。

しかし、そうはならなかつた。

所属不明機が避けた a<sub>3</sub> の弾丸は、そのまま空を直進し、 a<sub>2</sub> の放出したミサイルへとぶち当たる。

「――」

直後、所属不明機の目の前で大きな爆発が生じた。

ミサイルの爆発によつて発生した噴煙の中を、 $a_1$ は疾駆していた。  
敵の姿は見えない。だが、 $a_2$ と $a_3$ から貢つたデータを元に、大  
体の位置を割り出してある。

さらには、

……中央の部分だけ、空気の動きが違う！

恐らくはあの不可視のフィールドによるものだ。  
であれば、爆風によるダメージは期待できない。  
だが、曰くいましとしてなりば上等だった。

「――」

翔ける。

噴煙を左右に分け、煙の中を進み、

「！？」

捉えた、敵だ。散々こちらを遊んでくれた敵が目の前に居る。  
それに向かつて、移動の最中に上段の構えを取つた。

直後、視界が開ける。

噴煙の中心に生まれた、所属不明機が不可視のフィールドで作り上げた不自然な空洞。

その中で、a1と所属不明機は相対した。

互いが互いを認識し、a1は躊躇無く構えていた十字槍を振り下ろす。

数瞬遅れて、所属不明機もまた右手を上へと突き出した。

振り下ろされる十字槍を捌くためであり、フィールドの展開は早く、間に合つた。

だが、

「くれてやるよ」

「!-?」

a1は、持っていた十字槍を手放した。

勢いだけとなつた攻撃の意味さえなくなつた十字槍が、不可視のフィールドに触れ、逸れていく。

だが、a1の動きはそこで終わりでない。

空となつた両手を下段まで持つて行き、腰の部分で捻り上げる。そして、その手に一本の刀を召喚した。

「私の本命は槍でなく、刀でな」

刀を召喚しつつ、一步を踏み込む。

槍の間合いから、剣の間合いへと変えるためであり、相手に数瞬といえど時間を与えないためだ。

……「ただ近く、時間がなければ、フィールドも展開できまい……」

思つた直後、手の中に馴染む重さを感じた。刀の召喚が行われたためだ。

a<sub>1</sub>はそれを確認もせず、己の感覚を信頼し、

「 割れろ！！」

全力で切り上げた。

この戦いに、決着を突けるべく。

噴煙の中、a<sub>1</sub>は全力を持つて刀を振るつた。  
現時点における最高の一太刀。

それを、所属不明機の脇腹目掛けて振り上げる。

噴煙を切り裂き、空気を切り裂き、そして、相手の絶対防御にダメージを与えるべく振り上げた攻撃。

「 なつ！？」

だがそれを、振り切ることは叶わなかつた。

振り上げようとした一撃は、しかし相手の体に届くことなく止められている。

見た。何があつたのかを確認するために、そして理解した。相手がやつたことを。

相手は一いちじるの一撃を回避するでなく、防御したのだ。

その昔、達人でなければ成しえないと技の一つ。  
動く刀を捉え、無効化する無手の技。

「白羽取りだと…？」

a<sub>1</sub>の脇腹の前で、挟むように命わせる手の中から刃が見える。  
そう、a<sub>1</sub>が振るった刀は所属不明機の両の手によつて止められた。  
いた。

確認し、馬鹿なつとa<sub>1</sub>は思った。

あのタイミングで振るった刃を挟み止めるなど、並大抵のことではできはしない。

『a<sub>1</sub>…』

a<sub>3</sub>の声に、a<sub>1</sub>は呆然としつつあつた意識を戻した。  
そして、声の意味を理解する。

所属不明機が白羽取りを崩さぬまま、a<sub>1</sub>へ向けて蹴りを放つていたからだ。

「ちつ…」

舌打ちをし、刀を手放すことで後ろに移動する。  
だが、敵の蹴りの方が若干早い。  
だから、a<sub>1</sub>は己の左肩を前へと突き出した。  
釣られる動きで、左肩にある浮遊型の左肩装甲が前へ出る。  
そこに、敵の攻撃がぶち当たった。

「…」

衝撃を感じつつも、a<sub>1</sub>は己自身から下がることでその衝撃を後退

の推進へと回す。

そのまま距離を取り、a2の横にまで移動した。

『まさかあれを防がれるとはな……』

『いや、どんだけーーツスわ』

『真剣白羽取りとか、ISの戦闘で初めてみるんですけど』

『私もやられたのは初めてだよ』

『今日は初めて呂くしツスね、a1』

『嬉しくねー』

言いつつ、a1は刀を再び召喚し、構え、白羽取りした刀を海面へ捨てる所属不明機を見据えた。

a2もa3も同じように敵を見据える……が、所属不明機が動いた。戦闘に通じる動きではない。右手で頭を押さえ、空を見上げたのだ。何だ?……つと瓶割り小隊が考える中、所属不明機はうんうんっと二度ほど頷き、頭部を押さえていた右手を水平に屈いだ。

瞬間、所属不明機の両肩が膨らみ、拡張される。

靄に覆われ、何かはわからないがその位置からバーニアであると判断した瓶割り小隊は防御の姿勢を取った。

対し、所属不明機は動きを見せる。

ぐつと前へと前傾姿勢を取り、

「――」

飛んだ。上空へと、先程とは比べ物にならない速度で移動した。瓶割り小隊は咄嗟に追いかけることができず、ただ首の動きだけで相手を追うに留まる。

『a3!-!』

a<sub>1</sub>が叫び、a<sub>3</sub>が応じるよつて射撃を行うが、所属不明機には当たらない。

その間に所属不明機はどんどんと高度をあげ、やがて遙か上空にて方向を転換し、来た空を戻つていつた。

後の空域には、取り残された瓶割り小隊だけが取り残された。

『逃げられちやつたスねー……』

『最後の動き、ハイパーセンサーでさえ追いかけるのがやつとでした』

『そつだな。そして、悔しいが遊ばれていたんだろうな、我々は』

a<sub>1</sub>は思う。確かに、あの加速を追いかけることができなかつた。機体も、そして意識でさえもだ。

あれを戦闘に使われていたら、いつまでも手も足もでずにやられてしまううと。

『そもそも奴は、最後以外こちらに対して攻撃をしてこなかつたらな』

『ですね……こちらの攻撃は防御か回避だけで、反撃なんか全然して来ませんでしたし』

『何が目的だつたんスかねー』

『会場の方では何も問題が起きていないことから、別働隊があつたわけでもないらしい。つまりは……』

『あの機体のデータ収拾……ですかね』

だろうなつと通信を飛ばし、a<sub>1</sub>は考える。

従来のIS以上の自由な動きで、同時に止まらない加速。

一体どこの機体なのかと考え、その思考を放棄する。

それよりも、

……振り返るのも間に合わないくらい速いところは、ああこののを言つんだらうな。

そんなことを思い、a<sub>1</sub>は所属不明機が去つて行った方向に目を向けた。

何時か再び対峙することがあるのかは、わからない。

だが、あの速さをまたみてみたいとも思い、苦笑が漏れた。

『さて、帰つて仕事だな。これは』

『え？ いや、これ終わつたら休暇じゃないicusか』

『何を言つてゐる。こんなことが起きたんだ、後始末が大量に出てくゐる』

『げ……』

『ちよ、ちよつと待つてください！ それつて

』

焦つた声がa<sub>2</sub>とa<sub>3</sub>から漏れたのを聞き、a<sub>1</sub>はこれから起るであろう事態を完結に二人に説明した。

『まあ、休暇は無くなるだらうな』

a<sub>2</sub>とa<sub>3</sub>の悲鳴を聞きながら、a<sub>1</sub>もこいつぞりとため息を吐く。これであいつとのお出かけもパーだな……と。

## 2：一方的な戯れ・3（後書き）

戦闘パート、主人公機の大概っぷりをちょっと出す形で終了あと、ちょっと濃い名無しキャラにも挑戦

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5076s/>

---

竜と自由の空

2011年5月16日04時30分発行